森の生きものガイド

2018. 11. 15（第18号）
びわこ地球市民の森
守山市水保町2727

四季折々の森の植物や鳥・虫などの動物を紹介します

1．スダジイ（ブナ科）

園路を歩いていると、スダジイの樹をよく見ます。枝先に長さ１～２ｃｍの茶色い殻に包まれたドングリがいくつも集まってついているのが見られます。もう既に殻が３つに割れて、ドングリが樹の下に落ちているものもあります。

このドングリはスダジイと呼ばれ、タンニンがないので生で食べることができます。すこし甘味があっておいしいので、子どもの頃よく食べました。フライパンや電子レンジで軽く煎るとさらにおいしくなりますが、煎りすぎると堅くなります。

スダジイの花期は５～6月で黄色の小さな花が枝先に集まり、長さ長さ８～１２ｃｍの穂のような花房を作り、アーチ状にたれさがります。雌花の集まりは斜め上向きに伸びます。花には特有の強い香りがあり、ハチやカナブンなどの昆虫を呼び寄せ受粉を助けてもらいます。実が熟すのは開花した翌年の秋で２年かかって実が成熟します。一般的には、シイノキと呼ばれ、幹はまっすぐに育ち、高さ２０ｍにもなります。枝もよく茂るので丸い樹形をつくります。また、幹はシイタケの栽培の「ほだ木」に利用されます。

2．クヌギ（ブナ科）

この樹も「びわこ地球市民の森」に多く植樹されています。園路を歩いていると、樹の下に丸くて直径が２ｃｍ程度の大きなドングリが落ちています。また、ドングリをおおうお椀状のものを殻斗（かくと）と言いますが、まわりに細長い鱗片が多く集まってドングリを取り巻き包んでいます。

葉を見ると、長さ７～１５ｃｍで長く縁は鋭くギザギザとして針のようにとがっています。

クヌギのドングリはタンニンを多く含むので強い苦みがあってそのままでは食べられませんが、砕いて水につけアク抜きを何回も行ってタンニンを取り除くとドングリクッキー等を作ることができます。この樹もシイタケの「ほだ木」をして利用されます。

3．ユズリハ（トウダイグサ科）

里の森ゾーンの上流の橋を渡ると、直前の林がユズリハです。

ユズリハは若い葉が生長すると、濃緑色の老いた葉が次第に落ちてその場所をゆずることから名前がつけられた樹です。

葉の落ちた跡を葉痕（ようこん）と言いますが、維管束（いかんそく=水分や養分が通っていた管）の痕がついていて動物の顔に見えます。どんな動物の顔に似ていますか?

葉は長さ 15～20ｃｍ、細長い形で先端が鋭くとがっています。葉は革質で堅く、葉柄（ようへい=葉の柄）の赤色が目立ちます。

花は長さ 4～12ｃｍの花穂につきますが、花びらもガクもありません。実は 11～12 月に紫色を帯びた黒紫に熟します。

ユズリハは親から子に、子から孫にと次々と代を譲ることができるようにと願いを込めて庭木としてもよく植えられます。

4．タコノアシ　（タコノアシ科）

ふれあい池にタコノアシの実の入った袋や枝・葉が赤く色づき紅葉しています。タコノアシとは、奇妙な名前ですがタコの吸盤のような形をした実の入った袋、反り返った枝振りは「ゆでダコ」を連想させるので、うまく名づけたものだと感心させられます。

タコノアシは湿地や沼地などに生育します。県下では犬上川の河口付近に群生するなどそう珍しい植物ではなかったのですが、土地の開発やセイタカアワダチソウやヨシ等の影響を受けて生育数が減少し、環境省のレッドレストでは準絶滅危惧種に指定されています。

びわこ地球市民の森では2001年にはわずか3本生育していました。その後次第に増えてきています。

5．ミシシッピーアカミミガメ

公園内の水路にミシシッピーアカミミガメが生息しています。このカメはアメリカ南部からメキシコ北東部原産の外来種です。

日本へは1950年代後半から「ミドリガメ」として幼体が輸入されるようになり、膨大な数が持ち込まれました。1975年にサルモネラ菌が見つかったのと、カメが大きくなって家庭で飼いきれなくなったため「捨てガメ」が横行し、野外に放たれました。幼体（こども）の時は緑色、成体（おとな）になるとくすんだ黒っぽい色になります。顔の横に赤いラインが、甲羅や体に黄色や黒のしま模様が入るのが特徴です。

池や流れのゆるやかな川に生息します。雑食性で水草、藻などの植物、魚類、エビ、カニ、水生昆虫などの動物を大量に食べます。

在来種のニホンイシガメとは食べ物や住む場所が競合します。

ミシシッピーアカミミガメの方が体も大きく、産卵数も多いので、ニホンイシガメの生息や周辺の生態系に大きな影響を与えるため駆除する必要があります。

6．モズ　（モズ科）

顔や襟元に当たる風がヒンヤリと冷たく感じる今の時期には、びわこ地球市民の森にも「モズの高鳴き」が聞こえてきます。

モズは高木の頂や電線に止まって、尾を上下左右にくるりくるりと回しながら、「キイー、キイー、キイー、ジェッ、ジェッジエッ」とよくとおる鋭い声で鳴いています。この「モズの高鳴き」は秋の到来を感じさせるひとつの風物詩と言えるでしょう。

モズは鋭いくちばしと爪を持ち、とった獲物を食いちぎってしまう気性の荒い鳥として有名です。小鳥はもちろんのこと、ネズミ、ヘビ、カエル、トカゲなどの自分の体に比べて大型の動物も捕らえて食べます。また、イナゴ、コオロギ、イモムシなどの昆虫も好物です。

モズには捕らえた獲物を小枝や有刺鉄線に刺す「はやにえ（速贄）」の習性があります。

モズを見分けるポイントは、雄が「くちばしがカギ型、目の後方にかけて黒い帯、頭は茶色で大きい、尾を回すように振る」雌が「目の後方にかけて茶色い帯、脇腹にウロコ模様、体の形やしぐさは雄と同じ」です。